現代大学生における生きがい感が死生観に与える影響

B43104　高久和佳奈

【研究史】　死生観とは「生と死についての自身の考え方や受け止め方」のことである。また、広井（2001）は死生観について「私の生そして死が、宇宙や生命全体の流れの中で、どのような位置にあり、どのような意味を持っているか、についての考えや理解」とでも表されるような内容のものである、と述べている。

現代では、「死生観そのものがほとんど空洞化している、という状況になっている。そしてこのことは、私自身の世代を含め、特に若い世代になるほど著しい」（2000,広井）。しかし近年になって、死を論じることなく「生命の大切さ」や「生きる力」など生を論じることができるのか疑問視する声も聞かれ、死の準備教育の必要性が認識されつつある。（2005,高畠）

生と死は一見正反対に見えるだろう。しかし実際は生と死は表裏一体であり、切っても切り離せない深い関係なのである。死を意識できなければ自らの生と向き合うこともできないだろう。そこでわが国の死に対する土壌が整っていない状況を改善し、死生観に関して若い世代が学び、考え直すべきなのではないだろうか。

【目的】　現代では若者の自殺が後を絶えない。私たちが生活する上で「死」について考える機会が滅多にないことも原因のひとつだろう。こういった若者が死について軽視している傾向は今後変えていかなくてはいけない。人が生きる上で大切なことは「生きがい」を持つことであるといえる。生きがいを持つことで豊かに人生が送ることができ、死に対する意識も変化していくのではないだろうか。その為、死生観について現代の大学生がどのように考えているのか、また、生きがいと死生観の関係性の有無や生きがいの種類がそれぞれの死生観にどう影響を与えるかを、以下の４つの仮説をもとに研究することにする。

仮説１　「生きがいを感じている人ほど死に対する回避的受容が弱くなる」
仮説２　「存在価値が高い人ほど、死に対して恐怖心を感じている」
仮説３　「生きがいに対する意欲があるほど、人生における目的意識は高くなる」
仮説４　「身近な人の死を経験している人ほど、死への関心が高い」

【方法】対象者：首都圏の私立大学の学生 149 名を対象に質問紙調査を行った。
調査時期：調査は 10 月 25 日の「生命科学と生命倫理」、11 月２日の「高齢者心理学」の２科目で行った。なお、どちらも事前に人生観や死生観に関する授業を行っていた。
質問紙の構成：「臨老式」死生観尺度、死に対する態度尺度、生きがい感スケールの３つの尺度とフェイスシートで構成されていた。また、最後に「ご親族のお葬式に参列したことはありますか」、「ご親族以外のお葬式に参列したことはありますか」と被験者自身の死別経験を問う項目を付け足した。

【結果】
仮説１について、生きがい感の因子である「現状満足感」、「人生享楽」、「存在価値」、「意欲」因子の全ての項目において回避的受容と負の相関がみられた。その中でも最も高い相関は「意欲」と「回避的受容」であり、相関係数は-0.418（p<0.001）であった。つまり、生きがいを感じているほど、死に対する回避的受容が弱くなることが分かった。よって仮説１は検証された。

表１　生きがい感の各因子と回避的受容の相関分析表

	回避的受容
現状満足感	−0.355***
人生享楽	−0.253***
存在価値	−0.390***
意欲	−0.418***

（*:p<0.05,　** :p<0.01,　*** :p< 0.001）　n=149

仮説２について、相関係数こそ低いものの臨老式死生観尺度における「死への恐怖・不安」因子、死に対する態度尺度における「死の恐怖」因子のどちらも「存在価値」と相関があった。よって、仮設２は検証された。

表２　生きがい感における存在価値と死の恐怖の相関分析表

	死への恐怖・不安	死の恐怖
存在価値	0.217***	0.188**

（*:p<0.05,　** :p<0.01,　*** :p< 0.001）　n=149

仮説３について、生きがいにおける「意欲」因子の値が高いほど「人生における目的意識」は高くなることが表７から読み取れる。「意欲」と「人生における目的意識」には相関係数が 0.679（p<0.001）でありかなり高い相関があった。

表３　生きがい意欲因子と人生における目的意識の相関分析表

	人生における目的意識
意欲	0.679***

（*:p<0.05,　** :p<0.01,　*** :p< 0.001）　　n=149

仮説４について、「親族との死別経験」、「親族以外との死別経験」のどちらも「死への関心」因子との相関は見られなかった。よって仮設４は検証されなかった。

【考察】

仮説１：現代人には、一定の無気力さや、生きる意味を見失っている傾向にあると考えられる。それに伴い、死に対する回避的受容は多少なりとも感じてしまうものだろう。しかし、今回の調査で生きがい感の高い人ほど、回避的受容が弱くなる、つまり、生きがいを持っていれば、死に対して無関心にならず、生きることに対して肯定的になることができるのである。この仮説により、生きがいを持つことの意味を大きく主張することができただろう。

仮説２：存在価値が高かった人は、自分には存在価値があると思いたい、存在価値を認められたい、という承認欲求も含まれていたのではないだろうか。神谷（2010）は「りっぱな社会的地位につき円満な家庭を持っているひとが、理くつの上では自分の存在意義を大いにみとめながら、心の深いところでは生きがいが感じられなくて悩むことがある。」と言っている。つまり存在価値が高く、一見生きがいを感じているように見えても、存在価値がなくなってしまうことに恐怖心を感じているのかもしれない。「死の恐怖心を感じている」ということは、一見マイナスに感じられるが、そもそも現代人の死生観に関する関心は非常に薄い。その為、生きがいを持ち、生きがい感を感じることで死に対する思考をめぐらせるきっかけとなる。そして死に対するある程度の恐怖心を持っていることが、限られたた「生」をより充実させようとする意識に繋がるのだろう。

仮説３：本来生きがいには「未来性」が含まれていると言われている。「これからの生が新しい発展をもたらすであろうと期待するからこそ、生きがいは感じられる」（神谷,2010）と言われているように、生きがいを感じている人は未来に対する欲求を感じ、未来を積極的に受け入れることが出来るのだろう。

仮説４：親族との死別経験の有無は死への関心に影響を与えていなかった。今回の調査では死別経験の問い方を「親族、そして親族以外の葬儀の参列経験」の有無を答える形式に設定した。だが、葬儀に参列すると言っても、息を引き取る瞬間まで看取った人と、遠い親戚の葬儀に参列した人では感じ方が大きく異なるだろう。もしこれが「一緒に暮らしていた人を看取った経験がある」の場合には結果は違っていたかもしれない。

また、佐藤（1992）死は、いわば内側から当事者として経験することができないことがらである。われわれが経験しうるのは、近しい人であろうとなかろうと、他者の死、あるいは生物の死、あるいは生物・動物の死である。それは死の経験としてあくまでも間接的な経験で、直接の経験ではない。この直接と間接の差は決定的であって、それが死という問題を扱いにくいものにしている理由である、と述べている。死生観を形成する要因のひとつに死別の経験があると言われているが、佐藤（1992）が言うように、他者との死別は関節的な死の経験である。例えば両親や兄弟など近い存在を亡くした場合などにしか「死の関心」を高める要因にはならないのかもしれない。今回は対象が 10 代、20 代の大学生であり、両親や兄弟との死別経験がある被験者は少ないことが予想されるため、今回のこの結果に繋がったとも考えられる。

今回の調査の結果、「生きがいを感じている人ほど死に対する回避的受容が弱くなる」、「存在価値が高い人ほど死に対して恐怖心を感じている」、「生きがいに対する意欲があるほど人生における目的意識は高くなる」という３つ事柄が明らかになった。つまり、生きがいをもつことが死生観と向き合うことのきっかけになり、死生観の形成を手助けしてくれるものだと言えるだろう。最期の時はいずれ誰にでもやってくる。その際に「自分の人生は有意義なものだった」と心から思えるように自身の「生」と向き合っていかなくてはならない。また今後死に対する教育が普及されていくことを期待したい。

【引用文献】

神谷美恵子 2010　神谷美恵子コレクション生きがいについて　みすず書房
佐藤正英　1992　日本における死の概念 有馬朗人 東京大学公開講座　55　生と死　財団法人東京大学出版会
高畠安代　2005　学生の死に関する意識調査　瀬戸内短期大学紀要第 36 号
広井良典　2001　死生観を問いなおす　筑摩書房